

会議結果報告書

令和8年10月2日

会議の名称	令和8年度第2回社会教育委員会議	
種別	☒ 附属機関 ☐ 懇話会等	
開催日時	令和8年 8月 6日(木) 13時30分～	
開催場所	舞鶴市役所 別館5階 中会議室	
出席者	社会教育委員7名(欠席:阿部委員、西村委員) 生涯学習部次長兼生涯学習推進課長、事務局(3名)	
議題	1. 報告 1) 中丹社会教育委員連絡協議会総会について 2) 京都府社会教育委員連絡協議会総会の書面開催について 2. 事例発表 3. 協議 第34期社会教育委員会議テーマ設定について 4. その他 1) 近畿地区社会教育研究大会について 2) 京都府社会教育研究大会について	
公開の区分	☒ 公開	
	☐ 部分公開	[理由]
傍聴者数	0名	
審議結果 及び 主な意見等	1. 了承 2. 過去に北近畿及び舞鶴市で実施した調査の分析結果報告(江上委員) 3. 自分に影響を与えた人について話し、地域における「人づくり」や「人のつながり」に何が必要かについて意見交換を行った。議論の中では、愛のある「おせっかい」や「義理人情」が人づくりや地域づくりにおいて重要であり、そうした多様な大人と交流できる場をどのように作っていくかが今後の鍵であるという意見があがった。 4. 近畿地区社会教育研究大会、京都府社会教育研究大会、次回の会議予定等の日程を共有	
会議録の作成様式	☒ 詳細 ☐ 要約	
備考		

担当課	舞鶴市 生涯学習部 生涯学習推進課 TEL (0773)68-9223
-----	--

令和8年度第2回社会教育委員会議事録

第2回社会教育委員会議事概要

○開催日時 令和8年8月6日（木）13時30分～16時30分

○開催場所 舞鶴市役所 中会議室（別館5階）

○出席委員

江上委員、谷口委員、田中委員、中道委員、森川委員、吉岡委員、渡辺委員 7名

○事務局等

生涯学習部森次長（生涯学習推進課長兼務）、生涯学習支援係 高橋、山本、仲嶋

○傍聴者 なし

（表彰式出席：京都府社会教育委員連絡協議会 京谷会長、中丹教育局 岡田総括社会教育主事、舞鶴社会教育委員会前会長 福原習作氏）

《 表彰状伝達授与式 》 被表彰者: 福原習作 前会長（舞鶴市）

6月26日に開催予定だった京都府社会教育委員連絡協議会総会が台風接近により中止となったため、本会議の場を借りて、京谷安泰会長より表彰状が授与された。

1. 開会

渡辺会長：熊本で大きな地震が発生し、被災地は暑い中復興作業にあたっている。こうした災害などの有事においても、地域で助け合えるつながりを作るために考えていかなければいけない。本日の会議でもしっかりと考えていきたい。

2. 報告事項

（1）中丹社会教育委員連絡協議会総会（6/9＝綾部市）について

→事務局より説明

谷口副会長：今年度はグループワークが中心であり、参加者同士の交流が深まり、それぞれの立場からの話を聞くことができた良い機会だった。

渡辺会長：初めての中丹総会であり、少し身構えていたが、お互いの人となりを知り、ざっくばらんに意見交換ができる有意義な時間となった。

（2）京都府社会教育委員連絡協議会総会の書面開催について

→事務局より説明

3. 事例発表（江上委員）

江上委員：新任委員との情報共有を目的とし、全委員が共通認識を持って議論に臨めるよう、過去に北近畿地域および舞鶴市で実施した各種調査（高校生、保護者、市民、公民館職員対象）の分析結果について報告する。

（1）高校生・保護者の定住意識に関する調査（2018年・2019年）

- ・**地元に残る要因**：女性よりは男性のほうが地元に残る傾向が強く、地域への好感度が高い、就職希望者、地元企業に関する知識が豊富な生徒ほど定住傾向が強い。また、子育て環境に不安や不足を感じている層も、将来地元での子育てを具体的に見据えているためか、残留傾向が見られた。

- **市外へ出る要因**：保護者からの影響が最も強く、保護者が「外に出てほしい」と考えている場合、子どもも地元を出ようとする傾向が強くなる。また、本人が「自分の能力を活かしたい」「新たな挑戦をしたい」と考える場合に流出傾向が強まる。
- **地元との関わり**：地域学習は本来、魅力度向上に繋がるが、地域の厳しい現実や課題ばかりを強調すると、かえって地元離れを招く可能性もあるため、学習内容の工夫が必要。また、地域体験や地域の魅力を感じておらず、保護者の残留希望もない人ほど、地元を離れたがり、将来的にも地域と関わろうとしない傾向が見られた。
- **保護者の影響と認識のズレ**：子どもの進路選択には保護者の意向が最も強く影響するが、親子の間で「相手の考え」に対する勝手な思い込みや認識のズレが生じているため、この双方のすれ違いを解消するための世代間交流や直接的な対話の場といった社会教育的なイベントの創出が有効だと思われる。

(2) 舞鶴市民向け調査（2020年）

- **地域の魅力と交流**：市外での居住経験がある人や、学生時代から人との交流（友人や家族以外の大人との関わりなど）が多い人ほど、舞鶴市に魅力を感じている。「地域の魅力」とは「場所」以上に「人との交流」と結びついており、人々の交流を促すことが地域の魅力向上に繋がる。
- **地域活動のきっかけ**：地域活動に積極的な人の多くは、自発的ではなく「他人からの誘い」を契機に始めている。地域活動に興味を持ってもらうためにも、幼少期から活動に慣れ親しむ機会を作り、人との繋がりや誘い合いを生むことが望ましい。また、世代を問わず、地域での「身近に支え合える関係」への潜在的ニーズは高いものの、実際の関係構築には至っていない現状もある。

(3) 公民館職員に関する調査（2023年・2025年）

- **課題感と現状**：職員も「住民同士の交流」や「異世代の繋がり作り」を重視しているが、人事異動や単年度契約などにより、地域に馴染む期間（通常3～5年必要）の確保や、中長期的な計画立案が難しい環境にある。
- **必要なスキルと研修**：職員が地域に出向き、経験を積める仕組みや、館を跨いだ連携・スキルアップの機会作りが求められる。

【意見交換】

- 委員A：北近畿地域と舞鶴での意識差について、なぜ舞鶴ではやや意識が高い結果になるのか。
- 江上委員：調査対象（市民と高校生）の違いがあり、他調査結果と一概に比較することは困難だが、親自身は地元が好きでも「子どもには一度外の世界を見てほしい」と考えるケースもあるかと思う。
- 委員B：保護者の影響力が最も大きいという分析結果には、自身の両親や現在の子育ての経験からも深く共感する。私自身も市外での生活を経て舞鶴の良さを再認識し定住したように、子どもは親や祖父母の背中を見て育つものだと実感している。地域を問わず家族が与える影響は大きいため、この「保護者の影響力」についてさらに掘り下げた見解を伺いたい。

○江上委員：子どもの定着やUターンを促すには、子ども自身への直接的なアプローチだけでなく、最も強い影響力を持つ保護者に対しても地域の魅力や正しい情報を伝え、親子双方の意識を育む施策が不可欠だ。

○委員C：子どもに対する保護者の影響が大きいからこそ、親自身にも地域の魅力や地元企業への就職情報を知ってもらう機会を増やすとともに、子どもにとって多様なロールモデルとなる地域の大人と関わる機会を設けていくことが重要だ。

○江上委員：「自分の能力を試したい」と思う層ほど地域外へ出る傾向があるが、舞鶴でも自身の能力を十分に発揮できる場やチャンスがあると知ってもらえれば、地元に残る選択肢も増える。また、保護者の理解も不可欠なため、親子双方に対して地元の情報や多様なロールモデルを示す機会を作ることが重要だ。

○委員D：過去の取り組みを振り返る貴重なデータだ。近畿圏内の他地域でも同様の調査を実施しているのか。また、その結果において舞鶴との違いは見られるか。

○江上委員：他地域での調査は実施していないが、仮に行ったとしても結果は大きく変わらないと思われる。

○委員E：地域の大人が発する何気ないネガティブな言葉が子どもに影響を与えることを実感しており、幼少期から地域を愛する心を育むことが大切だと感じる。日常的に親がどのような言葉を発しているかで状況も変わってくる。

○江上委員：大人の何気ないネガティブな発言が子どもに影響を与えることもあれば、逆に子どもが地域の良さに気づくことで大人へ良い影響を与えることもある。大人と子ども、双方における関わり合いや意識づけが重要だ。

○委員F：他地域からの移住者としての視点で見ると、地元の方々は少し謙遜しすぎているように感じる。また、親からの影響等で男性が地元に残る傾向がある一方で、女性にとっては専門性を活かして働き続けられる仕事の選択肢が少なく、結果として若い女性が市外へ出ざるを得ない現状は、地域の存続に関わる深刻な課題だ。単に定住だけを目的とするのではなく、子どもが18歳になるまでに地域への愛着を持てる体験を社会全体で提供することが大切だ。また、人に頼るのが苦手な現代の親世代が今後の地域活動を担っていくことを考えると、世代を超えて人と関わり、地域のつながりを育む「人づくり」が不可欠だと感じる。

○江上委員：地元に残るかどうかは産業政策に関わる側面もあるが、仮に最終的に市外へ出たとしても、地域への愛着さえあれば将来的に地元と関わり応援してくれる可能性が高まる。そのため、まずは「地元への愛着」を持ってもらうことが極めて重要だ。

4. 協議内容

第34期の協議テーマについて（エピソードを通じた「ゆるやかなつながり」の検討）

→事務局より説明

第1回会議の振り返りを受け、今期はこれまでの「場所づくり」から「人づくり（つながる・集う）」に視点を切り替えて議論を進めたい。本日は難しい理論から入るのではなく、各委員から「これまで出会った素敵な人」「自分に影響を与えてくれた人」に関する個人的なエピソードを発表いただき、そのエッセンスを抽出・集約して「ゆるやかなつながりをどう作っていくか」の本質的な議論へ繋げていきたい。

【 各委員のエピソードおよび意見交換 】

- 委員C：現在の職場である高校へ行くきっかけとなったM先生。良い意味で「おせっかい」な方で、言うべきことははっきり言われ、当初反発しても、後から考えると腑に落ちることが多かった。しかし現代は、ハラスメントやリスクを恐れて「おせっかい」がしづらい環境になっている。相手によって言える範囲が変わってしまうような難しさがある。だからこそ、ゆるやかに人がつながっていて、意見が異なってもすり合わせができるような、お互い認め合えるような場が必要だ。
- 委員E：私が憧れる人物は、東舞鶴で店を営むRさん。裏表がなく、とにかく明るい女性で、肯定的でありながら、だめなことは明るくはっきりと伝えられる方。「人をつなげる場所でありたい」という言葉の通り、その方の店には自然と人が集まり、訪れるたびに新しいつながりが生まれている。地域や周囲の取り組みを全力で応援し、誰に対しても広く心を開く前向きな姿は、私の目標だ。
- 委員B：仕事で出会う各分野の代表者たち。連絡が非常に早く、義理人情をととても大切にする「昭和の良さ」を持ったすごい大人たちに日々影響を受けている。一方で、子育て協議会の活動で接する学校や行政の方々からは、言葉を慎重に選び抜き丁寧に伝える姿勢を学んでいる。出会う人からの学びを自分の糧にしつつ、自分自身で交流の場に踏み出せない人を上手に「繋げていく」役割を果たしたい。
- 委員D：両親、学生時代の仲間、大正琴の先生など多くの人に支えられ、育ててもらった。大正琴のT先生については演奏を初めて聴いた際に強い衝撃を受け、自分の中での意識が変わったし、先生の活躍が自らの励みとなっている。また、資料の中にある「人の繋がり」については、ネットで情報が得られる時代であっても、地域の中で人と直接会話しながら教わり、悩みや情報を共有し合えるつながりが必要だと思う。
- 委員G：私自身、単身の時は自発的に地域コミュニティへ飛び込む難しさを感じていた。地域の中には「言われたら（役割や最初のきっかけを与えられたら）やるけど、自分からは踏み出せない」人が結構おられるのではないかな。自分から踏み込むのが難しい人にこそ、気軽に声をかけてくれる人の存在が重要だ。散歩している時の近所の方との何気ない挨拶や声掛けこそが、地域と繋がる第一歩であると感じている。
- 委員F：出産時、親族も知り合いもおらず孤独を感じたことをきっかけに、子育てを通じて自分たちの仲間も育てていくという取り組みを知り、活動に参加した。先進的な活動をされている宇治のサークル代表の方と会合で知り合った際に、また別の素晴らしい活動をされている方を紹介してくださった。わざわざ声をかけ、人と人を温かく繋ぐ姿勢と、周囲を引き込む説得力に感銘を受け、自分もこういう存在になりたいと思った。また、大学で社会福祉を学ぶ中で、言葉が通じず施設で手厚い支援が必要な方のサポートした経験から、表情からその方の気持ちを読み取るなどの「言葉以外のコミュニケーション」の大切さを知った。人の成長は積み上げ方式ではなく、螺旋を描きながら進むのだと実感した経験から、子育てへの忍耐力や「違いは間違いではない」と他者を受け入れる寛容さを学んだ。人生観を変える出会いには、言葉で導いてくれた方との出会いもあれば、言葉がないからこそ感じ取れた出会いもあった。年上の素晴らしい先輩方から教わることはもちろん、言葉を持たない0歳の赤ちゃんの声や様子に思いを馳せる日々の中からも多くの学びがある。
- 委員A：自身の原点はバレーボールの部活を指導してくださった先生方で、中学時代の先生は、バレーを一から勉強され、大変親身に指導してもらった。高校時代の先生は熱心な指導とともに審判や代表経験など新たな挑戦の場を与えられた。また、愛知県で初めて教師となった

際に指導してくださった先生は、豪快で器が大きく、体育教師としての姿勢や大切さを教えられたし、一人前に育ててもらった。

- 会長：皆様から影響を受けた方々についてお話しいただいた。その出会いの「具体的にどのような点に惹かれたのか」、またそれを手本に「将来どのような人物になりたいと思うか」といった深掘りのエピソードや人生の目標について、ぜひ追加でお話を伺いたい。
- 委員B：50歳を過ぎ、お礼や挨拶といった当たり前の行いである「義理人情」の大切さをより深く実感するようになった。時代が変わっても義理人情に勝るものはなく、これをしっかり守ることこそが、社会生活を円滑に送る上で最も大切だと感じている。
- 委員D：大正琴のT先生から「どうしてる？」と気にかけてもらい、時にはご指導もいただくことが非常に嬉しく、心地よく感じている。人から指導を受ける機会が少なくなった今だからこそ、自分が先生と同じ年齢になった際には、周囲にそのように声をかけられる存在でありたい。
- 委員A：叱られた際にその奥にある愛を感じ取れるかどうかは、日頃の人間関係や「人づくり」の違いによる。単に反発されるのではなく、相手に想いがしっかりと伝わるような信頼関係を日頃から築いていくことこそが重要だ。
- 委員C：マザー・テレサの言葉にある通り「愛の反対は無関心」であり、人に気にかけてもらうこと自体が安心感や愛に繋がる。現代は周りを気にして本音を言えない人が増えているからこそ、誰もが安心して自分の思いを伝え、互いに受け止め合える環境やコミュニティづくりが重要だ。
- 委員E：魅力的な人とは、人が好きで積極的に声をかけて人を繋ぐ人物です。そういう方には自然と人が集まってくる。他者と距離を置きがちな現代において、こうした「おせっかい」とも言える気遣いこそ必要だ。
- 委員G：特定の誰か一人からではなく、小学生の際にラグビー部の活動で地域の大人たちと世代を越えて接する機会が多く、様々な方から生き方を学んできた。地域の大人と自然に触れ合える場があれば、おせっかいや義理人情も素直に受け入れられるようになるのではないか。そうした「おせっかいが許される場」をどのように形成し、その場を生み出せる人をどう育てていくかが、今後の地域における人づくりの大きな課題だ。
- 事務局：「声かけを待っている人」と「声をかけたい人」が、お互いに一步を踏み出せずにすれ違っている。この思いを繋げる仕掛けが必要だ。
- 委員A：中学校部活動の地域連携の実証実験では、文化系・運動系を問わず多くの団体や個人が自発的に受け入れに手を挙げられた。きちんとした機会やきっかけさえあれば、「子どもたちのために協力したい」と応えてくれる人々が地域には数多く存在するのだと感じた。
- 委員C：「おせっかいしたい人」へアプローチし、活躍できるオープンな場を作れば、つながりを求める人も自然とそこへ集まるのではないか。その「場」の役割を果たせるのが、例えば公民館のような施設だ。地域の中でそうした思いを持つ人材やニーズを洗い出し、公民館などの場と繋ぎ合わせることができれば、非常に良いコミュニティが形成されるのではないか。
- 委員F：上手におせっかいができるのは、その方もかつて支えられた原体験があるからであり、支援においては相手の「受援力」を引き出しつつ、過保護にならず上手に巻き込む関わりが大切だ。こうした力は、イベント本番のような場ではなく、むしろ準備や片付けなどのオフ

の場面でのやり取りを通じて「非認知能力」として育まれる。マニュアル通りにいかない人間関係において、拒絶されても折れない粘り強さと、一見面倒なアナログの試行錯誤を楽しめる姿勢こそが、今の社会で求められている。

○委員C：義理人情や失敗を学びに変える思考や判断はすべて「非認知能力」にあたり、変化の激しい時代を子どもたちが生き抜くために、こうした非認知能力を高める実体験が不可欠だ。ネットや生成AIでは得られないリアルな学びの場として、地域クラブ活動などを通じ、親や教師以外の「多様な地域の大人」と触れ合う機会を増やしていくことが必要だ。

○委員B：「良いおせっかい」ができる人は、見返りや損得勘定を超えて「ただ人が好きで幸せになってほしい」と行動し、周囲を巻き込む強い魅力を持っている。時に暑苦しく面倒に思えても嫌いになれない存在であり、私から見れば一つ上の境地に達していると感じる。社会全体にとっても望ましいそうした人物は、生まれつきなわけではなく、人生のどこかのタイミングでどのように育成されていくのだろうか。

○委員C：おせっかいの形や得意分野は人それぞれであり、互いに「自分には真似できない」と感じるほどの違いやアプローチの多様性がある。また、おせっかいを続けられる理由は、学校の先生と同じく、失敗を重ねても「一度報われた成功体験」で大きな喜びが得られるからだ。その喜びがあるからこそ、「また次も頑張ろう」という原動力が生まれるのだと思う。

○委員D：おせっかいを焼く方も相手の様子をよくみておられ、喜ばれる関わり方や「今は踏み込まない・待つ」といった適切な引き際も見極められる、極めて敏感なアンテナを持っておられる。

○委員E：婚活マスターとして活動しており、舞鶴で出会いの場を提供するおせっかいを焼いている。自ら動けない人の背中を押す一方で、ハラスメントにならないよう「この人なら受け入れてくれる」と相手を見極めるアンテナの重要性も実感している。

○会長（まとめ）：地域活動などにおける多様で自発的な「おせっかい」が、結果として人を育てる「人づくり」の基盤になっていると実感した。本日いただいた多様なご意見を踏まえ、今年度のテーマについて事務局と協議を進め、第3回会議でのご承認に向けて取りまとめる。

5. その他

(1) 令和8年度近畿地区社会教育研究大会について（10/29～30＝大阪大会）
→事務局より日程等説明

(2) 令和8年度京都府社会教育研究大会について（11/16＝亀岡市）
→事務局より日程等説明

次回の「第3回社会教育委員会議」について
→事務局より、10月中下旬の開催を提案。後日、日程調整させていただく

6. 閉会